

■ 目線を変える

アメリカで人気のテレビ番組があります。大会社の社長が変装して自分の会社で一般社員として働くというものです。当時のセブン・イレブン社の社長がコーヒー販売やパン製造工場、店舗スタッフなど、自社の様々な場所での仕事を体験します。社長なのでどんな仕事でもできるのかと思えば、やはり慣れない仕事はできません。現場のスタッフに指導してもらって、同じ立場に立って仕事をすることでお互いの状況を理解し、相手のことを分かろうとします。この社長も会社の状況を実際の現場で見て、社長室で報告を聞くだけでは分からなかったことを知ります。職員も社長だと分かった後はびっくりしますが、社長の姿を見てもう一度頑張ろうと気持ちが変化していききました。このように、相手を理解しようと目線を変える生き方は周りの人にも影響を与えます。

「ブラウン神父の事件簿」という物語にも目線を変える生き方が示されています。これは、神父が探偵となって事件を解明していくストーリーで、ジョン・オコナー神父という実際の人物をモデルにしたものです。この神父は、目線を変える生き方によって著者を変えてくれた人でした。物語の中の神父の言葉に、「犯行に及ぶ時間の殺人犯の精神状態を心に描いてみると、私はいつもそれが他人だとは思えなかった。だからそのようなけしからぬ犯罪者を自分自身の裡（うち）に見つけて、ひっ捕らえ、それが暴かれないようにいつも一緒に暮らしても大丈夫なよう自分の手に握っていかねばならない」とあります。相手を批判して裁くのではなく、相手と同じ目線になって理解しようとするのが大切なのです。

■ 短所と長所

ペテロは失敗も多く、何かがあると自分の想いが出てきてすぐ口に出してしまう人でした。自分の想いを表現できることは長所であり、御霊によってそれが語られるなら問題ありませんが、そうでなければ語る言葉は正しくないものが出ています。短所と長所は紙一重です。ペテロも自分の想いを表現できるという長所を持ちながら、人の意見を聞かずに自分だけでやろうとしてしまいました。

そんなペテロが変われたのは、短所である部分に向き合ってくれた人がいたからです。ダメだと否定せず、なぜ失敗だったかを伝え、本来の長所の姿に戻そうとされたのです。その罪を代わりに背負うから、あなたは失敗から戻りなさいとイエスキリストは伝えられています。

■ どう生きるのか

「こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい」(Ⅱペテロ 1：5～7)

ペテロは、生きる中で大事なものはこれだけでいいと言っています。言葉で見ると難しく思えますが、これは私達もともと持っていたものです。信じる気持ちがあれば私達には徳（卓越性）という長所があります。長所を生かすために知識を持ち、体験することによって自制ができます。それによって忍耐と敬虔が与えられ、愛に成長していくのだと聖書は約束しているのです。

■ 私的解釈を施してはならない

私達に用意された約束（預言）が聖書にはたくさんあります。「それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち聖書の預言はみな人の私的解釈を施してはならない、ということです。」(Ⅱペテロ 1：20)

イエスキリストが、人の子は死に渡され三日目に蘇らなければならないという聖書の預言を言われた時、ペテロはそれを諷めてしまったことがありました。それに対して、イエスキリストは、私的解釈によって聖書の預言を曲げてはならないことを伝えます。これは弟子達だけに言われたのではなく、後に聖書の預言を読む全ての人達に対して間違った解釈で受け取ってはならないと伝えていきます。まっすぐに御言葉を受け取りましょう。

■ 御霊に動かされる

戦時中、ハーフの男の子が皆にいじめられていました。子供達がハーフの男の子を自分達とは違うといじめる中、同じクラスの一人の男の子が「彼も同じ人間だ」と言って助けます。その親切な男の子はその後、戦争で亡くなってしまいましたが彼が教会に行っていたことを助けられた男の子は覚えていました。そして自分も教会へ行き、イエスキリストを知ります。彼は自分を助けてくれた男の子が自分の身になって考えてくれたことを知り、自分も彼の身になって考えることを学びました。この男の子のように、聖書には相手を理解しようとした人達のストーリーが描かれています。

私達が赦されたように人を赦し、受けたものを次の人に流したいと願うなら、私達は相手の心を理解できるはずですが、相手を理解しようとするのは、私達の心から裁く心を取り去ります。相手を理解するという事は、自分に近い人ほど難しいかもしれません。暑い日差しの中で作業する人を大変だと理解してあげられても、自分の家族が頑張っていることはいつの間にか当たり前のことのように感じてしまう、私達はそんな弱さを持っています。

今、もう一度相手の気持ちになって考えてみましょう。

■ ペテロの生き方

ペテロはすぐ「人のこと」を気にして自分と比較していました。そんなペテロに、イエスキリストは、それがあなたに何のかかわりがありますか(ヨハネ 21：22)と言われます。

その人に定められた役割や計画はペテロにはかかわりのないことだったからです。私達は比較し、持論で人を動かそうとしてしまいます。その人を良くしてあげたいと思いが間違った行動を起こしてしまうのは、その人の気持ちが分かっていないからです。人と自分を比べてしまう弱さを捨て、相手を理解しようとしなければなりません。

このように、ペテロは失敗ばかりで人々の前に立つにはふさわしくないものでした。しかし、その失敗に向き合うことで変えられた生き方があったからこそ、彼の遺した言葉は人々の心に届いたのではないのでしょうか。

あなたの人生を通して語るべき言葉を語った時、それを聞いてくれるのは誰ですか？

相手を愛し、理解しようとするなら私達の言葉は相手に届きます。

■ まとめ…

相手の心に寄り添い、理解しようとした人達のように私達も目線を変えなくてははいけません。

私達の口から出る言葉がずれてしまわないように、いつも神様が私達に語って下さる声に耳を傾けていきましょう。